登録有形文化財
城下町の西口で大正ロマン

翁橋（おきな）

津山城下を目指して出雲街道を進むと、南北に流れる藺田川（いだがわ）との交点となる翁橋が津山城下への西の入口です。江戸時代には大番所が置かれているほど、重要な場所でした。ちなみに東の入り口の大番所は、宮川大橋の西詰めでした。

『津山誌　上巻』（矢吹正則著　明治16年）に「翁橋。木製の勾欄（こうらん）付き。一名を茅橋、または九蔵橋という。宮脇町と西今町の間の藺田川にかかる長さ八間一尺、幅四間、橋の下の深さ一尺五寸である。修理は官費」と記されています。翁橋の由来は平安時代に書かれた「五代集歌枕」という書物の中の歌枕として用いられている言葉「美作国翁川」がこの川の下流であるといわれていたことから、名付けられたそうです。また九蔵橋というのは森家家臣の今村九蔵が橋のたもとに居住していたためであり、茅橋は西今町の旧町名と同じです。

現翁橋の架設の詳細はわかりませんが、設計者としては中山伊平の名が残されており、橋の東南側の欄干に「大正十五年、一月架設」、請負者・鈴木春平、石工・鞍馬駒太郎」と刻まれていることから、両名によって木橋から鉄筋コンクリート造に架け替えられたようです。今はアスファルト舗装がされているのでわかりませんが、橋上には木レンガが敷き詰めてありました。

岡山県の登録有形文化財指定の橋として唯一の翁橋には、四隅に位置する大型の欄干親柱に、当時日本でもてはやされたアールデコ様式が取り入れられています。この凝った親柱に比べて、欄干の鉄パイプが素気なく見えますが、当時としては先進的なものだったのでしょう。

大正期の鋼鉄橋は岡山県内で京橋（岡山市）と日芳橋（井原市）の２橋で、しかも現存するトラス橋としては日芳橋が最古です。照明器具こそ違いますが、花崗岩の親柱は翁橋によく似ており、この時代の流行だったのかと想像してしまいます。

翁橋を渡ると大正９年（1920）に土居銀行社屋として建てられた作州民芸館があります。外観は正円アーチと直線で構成されるルネッサンス様式を基本としながら、多彩なモチーフが用いられています。特に玄関周辺は、両翼を張り出すなど厳格な左右対称で、正面性の強い意匠となっています。また、正面１階にドリス式、２階にはイオニア式の西洋古典式風のオーダーが付く石造風の外観を備え、作州民芸館は翁橋ともども城西の出雲街道の伝統的な町並みで、存在感を主張しています。

■位置図

国登録有形文化財「作州民芸館」
大正９年（1920）に土居銀行として建てられ、平成４年に津山市が修理し、作州民芸館として活用している。

国登録有形文化財「翁橋」
舗装の下には今も建設当時の木レンガが眠っている。

翁橋の鉄パイプの欄干

西今町の通り